

らんスタジオ [写真スタジオ]

Laquan Studio

DreamLabo 5000



銀塩ではくすんでいた赤、紫、緑、
繊細な着物の柄もDreamLabo 5000 なら“ガン”と出てくる。
銀塩機からのリプレイスで品質だけでなく、色管理と生産効率もアップ。

1921年にニューヨークで創業し、100年弱の長い歴史を持つ株式会社らんスタジオは、世代を超えて多くの人の記録を写真に収め続けてきた老舗の写真スタジオです。

デジタルカメラの性能が上がり、誰でも簡単に写真が撮れるようになった今でも、らんスタジオを訪れる人が絶たないのは、写真の世界観を作り出す広大なスタジオ、専門スタッフによるプロフェッショナルなサービス、映し出される写真と写真集のクオリティの高さ、そして家族のすばらしさ、つながりのすばらしさを大事にする、写真スタジオとしての想いにあります。

2017年2月、らんスタジオは全国14店舗の出力を一手に担う出力機を、銀塩タイプからインクジェットタイプのDreamLabo 5000 に完全リプレイスしました。およそ1世紀にわたり写真と向き合ってきた、らんスタジオがDreamLaboに切り替えたきっかけとはどのようなものだったのでしょうか。そしてその品質をどのように評価しているのでしょうか。株式会社らんスタジオ 取締役 山崎達郎さんに伺いました。

— まず、DreamLabo 導入前の環境からお聞かせください。

DreamLaboを導入する前は、銀塩プリンターとキヤノンの大判インクジェットプリンタをサイズによって使い分けていました。ちょうど最後の銀塩プリンターを導入したあとにDreamLaboが発売されたんですね。そのときはまだ用紙の種類も揃っていませんでしたし、どこか人工的な印象を受けて。そのときは「品質はいいけれど、急には替えられないな」と感じていました。

— そうした印象を持っていたなかで、今回、DreamLaboを導入されたのはなにかきっかけがあったのでしょうか。

DreamLabo自体はPHOTONEXTなどのイベントごとにチェックはしていて、「段々ようになってきたのはファインアートタイプの写真集を見たとき、「すごいな、こういうものを作りたいな」と思えたことですね。最初の頃に感じていた“いかにもデジタル”というような違和感もありませんでした。

用紙を使い分けることで、これまでの銀塩プリントと同じようにも使えますし、ファインアートタイプのような風合いのある紙を使うことで銀塩プリントとは違った、新しい表現もできる。銀塩プリンターの代わりに導入するメリットは十分にあると考え、導入を決定しました。

— 言わば、銀塩プリンターの上位互換として採用をされたということですね。品質面ではどのように評価されているのでしょうか。

DreamLaboが銀塩プリンターよりもすぐれていると思うのは、色と解像感ですね。

銀塩ではくすんでしまっていた赤や紫、緑がDreamLaboでは“ガン”と出てくるようになりました。着物の柄にはよく紫や赤が使われていますが、そうした色を実際に目で見た色に近いかたちで表現してくれる。暗部の階調表現もDreamLaboのほうがつぶれることなく、正確に再現できていると思います。

— 解像感とは具体的にどのようなものなのでしょうか。

同じデータで銀塩プリンターとDreamLaboでサンプルを作り、見比べるとはっきりとわかるのですが、たとえば着物の柄を比較すると、銀塩のほうは薄いフィルムが1枚かかったような、少しもやっとした感じなんですね。銀塩ならではの“やさしさ”とも言えると思うのですが、ディスプレイなどで見比べると、もともとデータが持っているのはDreamLaboが出した画に近いと感じますね。作ったデータがそのままプリントされているような印象を受けます。

— 品質面以外でDreamLabo 導入のメリットを感じる点がありますか。

色の安定性にすぐれているということですね。業務用の銀塩プリンターは、現像液の温度が1℃違うだけでプリントの色が変わってしまいます。もちろん機械側でも管理されていますが、朝出したものをもう一度夕方出すと色が違うということがあるんですね。複数冊作る写真集で1冊だけ色が違うとか、1枚だけ色味が違うというのは



らんスタジオでは、大判サイズをのぞく、すべての写真プリントを銀塩からDreamLaboにリプレイス。着物の柄やドレスのレースも克明に表現できるようになり、紫や赤、濃い青もよりあざやかに表現できるようになった
上段:フォトスクエア
下段:フォトスクエア(ミニ)



は品質管理上ありえませんかから、そういうときはすべて出し直さなくてははいけない。とにかく、銀塩プリンターは色を安定させる手間がかかるのです。そうした管理の時間はインクジェットタイプのDreamLaboにはほとんどありませんから、管理面での負担軽減につながり、結果的に生産効率の向上にもつながっています。スピード面でも、単純な処理速度で言えばDreamLaboのほうが速い。ただ、プリントの幅にあわせて用紙を切り替える必要があるので、この点は社内のワークフローを整備しているところです。

あとはプリントの耐久性ですね。銀塩の時代はまれにペーパーの品質の問題で褪色してしまうケースがあり、悩みの種になっていました。世代を超えて残したい記念写真なのに1、2年で褪色してしまっは意味がありません。DreamLabo導入にあたっては用紙の耐久テストの結果なども見せていただいて、DreamLaboがすぐれているとわかりました。こうした点もDreamLabo 導入を決めた理由です。

— 現在のラインナップのなかでDreamLaboをどのように活用されているのでしょうか。また、今後、どのように活用される予定ですか？

DreamLaboでは対応できない大判サイズの商品を除いて、すべてDreamLaboでプリントをしています。完全リプレイスのかたちで導入をしたので、いまは一切、銀塩プリンターを使っていません。

用紙は基本的に発色がよく、指紋がつきにくいラスタタイプを使っていますが、一部の店舗では、ファインアートタイプを使った写真集も取り扱いを開始しました。

今後は両面印刷できるDreamLaboのメリットを活かして、厚紙に貼らずにそのまま製本する写真集もラインナップに加える予定です。七五三や成人式、ウェディングのようなビッグイベントに使っていただきたいですね。「家族で集える写真館」という、らんスタジオの持ち味を一層出すことができるのではないかと考えています。



左: DreamLaboは給紙ユニットを追加し、4つのサイズを常時装填している。表紙や大判のプリントなど、DreamLaboでは出力できないサイズのはCanon iPF8400(写真・右奥)でプリントしている。
右: アルバム製本も自社内で行なうことで、撮影からプリント、製本をワンストップで提供。全国の店舗からの発注を一手に担う



山崎達郎
Tatsuro Yamazaki
株式会社らんスタジオ
取締役



株式会社らんスタジオ／東京都武蔵野市。1921年、鈴木清作がニューヨーク五番街にて「らんスタジオ」を創業したのち、1930年に帰国。阿佐ヶ谷に国内店舗を開業。バリエーション豊富な広いスタジオと、専門スタッフによるヘアメイクや撮影によってクオリティの高い記念写真を提供している。二世帯、三世帯が集まって集合写真を撮影することも可能。現在は全国に14店舗を展開中。



記念写真の定番商品・写真集「フォトスクエア」は、本体のプリントをDreamLaboで行ない、表紙は大判インクジェットプリンタ(Canon iPF8400)でプリントしたものをラミネート、上製本に仕上げたものを専用函に収納。この豪華アルバムには、携帯用として同じ内容のミニ写真集が付属(左)。用紙はいずれもラスタタイプを使用している